

『教行信証』の教巻の標挙について (一)

日野環

一 課題の輪廊

親鸞聖人の選述『教行信証』の「教巻」の「標挙之文」と言えば「大無量寿経眞実之教浄土眞宗」とあるこの十三字をあぐるに何人もためらう者のないのが今日である。而してかかる場合この十三字が「教巻」に置かるるスペースは――

顕浄土眞実教文類一

愚禿釈親鸞集

大無量寿経眞実之教浄土眞宗

謹按浄土眞宗有二種廻向一者往相二者還相就往相廻向

有眞実教行信証

夫顕眞実教者則大無量寿経是也……

の如く題号―撰号―標挙―本文と次第して列記されておる。これが今日『教行信証』を講讀するものの「定本」となっておる『六要鈔会本』及び『御自釈』に於ける文相配列の次第である。

しかし『阪東本』に於ては、いわゆる「標列」が記載さるべき紙面が欠失しておるため確言は出来ぬが、少くとも「教巻」の首題と「本文」との間に「大無量寿経眞実之教浄土眞宗」という「標挙之文」が記入さるべき紙面の余地がない。それは影印本によって明かである。さすれば

『六要鈔』にいう標列は「教巻」の「題号」の前「総序」の後即ちそれらの中間に置かれてあったと推測することが出来る。それは『高田本』及び『西本願寺本』の

如くであつたであらう。殊に『西本願寺本』は文永十一年宗祖聖人の十三回忌に当る年時に書写されたものと見られており、その書写の様態が全体としてもつとも『阪東本』に近似してゐる故に『阪東本』にもおそらく『西本願寺本』の如くあつたと相定してもよいであらう。

『高田本』に於てもまた然りとすれば、一は親鸞の眞蹟であり、他の二者は最も由緒伝来の正しい現存する最も古い伝写本であり、かつては親鸞自筆の「清書本」とすら考えられたものである。就中『高田本』は建長七年聖人八十三歳、御在世中に於て直弟子專信によつて謹写されたものである。これ等の最も權威ある伝本と、今日の我等が依用し定本化したる版本とその「題号」「撰号」「標拳」の「あり方」その占むる紙面の位置が相違する。

のみならずこれを板本に於て検討しても、先ず刊行の莫失を寛永十三年の所謂「寛永板」とするが、それにひきつづいて「正保」「明暦」「寛文」と徳川期に於て四種の板本を持つことであるが、少くとも「教卷」の標拳の文の「あり方」は、「寛」「保」「暦」の前三版は同様である。――

大無量寿経 真実之教
浄土真宗
顕真実教一

顕真実行二

顕真実信三

顕真実証四

顕真仏土五

顕化身土六

すなわちこれ等「七行」が「一群」に於て連らねられておる。而してその「在り場」は――「総序」「標列」(七行)「教卷首題」「撰号」「本文(卷教)」と次第しておる。標列七行が一群として「総序」と「首題」との中間に置かれる。しかもそれが占める紙面に於ける「在り様」そこから与える感覚から言えばこの「一群七行」は「総序」に属する。これは一応注意しておくべき「ポイント」である。しかして徳川期四版のうち最も時代の遅れる「寛永版」に於て標列の七行が分割されて「大無量寿経 真実之教
浄土真宗」なる一行が「教卷」の「首題」と「撰号」の次に移動して本文(卷教)の直ぐ前に置かれた――

総序(愚禿親鸞述)

頭真実教一

頭真実行二

頭真実信三

頭真実証四

頭真仏土五

頭化身土六

頭淨土真実教文類一愚禿積親鸞集

大無量寿経真実之教淨土真宗

しかしてさらに注目すべきことは、「総序」の「序題」の次に「愚禿積親鸞述」という「撰号」が置かれておることである。「信卷」別序の「序題」の次にも「愚禿積親鸞述」と「撰号」が置かれておるのである。こうした如く「総序々々題」及び「信卷別序々々題」に次いで「愚禿積親鸞述」とあるものは「標列の七行」が必ずと言ってよいかと思うが割れて「大無量寿経真実之教淨土真宗」の「十三字」は「教卷」の「首題」とその「本文」との中間に移動しておるのである。

この個所は『阪東本』では欠失脱落しておることはすでに述べたが『高田本』『西本願寺本』ではともに「標列七行」は一連をなし一群をなしておるのである。これを

動かすならば七行一連一群のままに移動せしむべきだと信ずる。

宗祖が『教行信証』に於て標拳の文を記入されたについては『選択集』に「南無阿弥陀仏往生之業念仏為本」の所謂「題下の十四字」が置かれてあるかの元祖の心に感應するものがあつての事であるが、かの「題下の十四字」は「教相章」だけの標拳ではなく『選択集』一部全体の総帳であるが如く「大無量寿経真実之教淨土真宗」は『教行信証』六巻中の第一巻「教卷」だけの標帳ではなく、『教行信証』一部六巻全体の標帳である。その意味を標示したものが『高田本』及び『西本願寺本』等の「七行一連」のかの「標列」である。「標列」と言うよりもそれ全体で一つの「教卷」の標拳なのであると思う。かく意味を持つものこそが「教卷」なのである。この故にこそ「化身土巻」がその「首題」に於て「頭淨土方便化身土文類六」と掲ぐるにもかかわらず、その「尾題」に於て「頭淨土真実教行証文類六」と示して「方便化身土」を「淨土真実」の内に摂受しておられる。『阪東本』に於てはこの尾題はすぐ前の『華嚴経』の偈とともに一段と墨色が濃い。すなわち筆端を改めて書きとめられた事が窺われる。

転じて『高田本』を窺うに、章を立つること六篇、巻を調うること六軸と言いが如く、六篇の内容がそのまま六巻に配されておる基本的な形体である。而して、各冊各々「外題」をブツつけに墨書してある。この「外題」の筆蹟は「本文」と同筆とみられる。一見すれば宗祖の筆蹟かと今でも思い迷うが如くである。その各巻の外題は右の如し——

頭浄土真実教行証文類第一 (教卷)

頭浄土真実行文類第二 (行卷)

頭浄土真実信文類第三 (信卷)

頭浄土真実証文類第四 (証卷)

頭浄土真仏土文類第五 (真仏土卷)

頭浄土方便化身土文類第六 (化身土卷)

すなわち第一冊「教卷」のみは「総題」を以てその「外題」としておる事は幾度も沈思すべきである。六巻六冊各々に「別題」を以て外題とするならばそれにて統一される。或いはまた各冊みな「総題」を以て外題とし「第一」「第二」乃至「第六」と巻を追ってゆくならばそれでも統一されるであろう。然るに今はそうではないのである。第一冊「教卷」のみは「総題」である。他は各々「別題」である。外的な統一ではない。親鸞の信意志は

かくの如きものであったことを頭わしておると思う。これは伝写した人の粗忽なる誤写ではない。注意して見ると本文書写の同一料紙を以て標紙とし、それに外題が書写されていた。後ほど渋紙表紙をその上に粘着せしめ改めて同一の外題をその上に直に墨書した為に最初の標紙の外題は一応隠されてはいるけれども、それは、同一の「総題」であることが知られるのである。この『高田本』には「総序」の「序題」の下には全く「撰号」が置かれておらぬ。この点『西本願寺本』も同様である。

『阪東本』も同一のようである。かくて「総序」の文を終って「大無量寿経真実之教
浄土真宗・頭真実教一乃至頭化身土六」の標列が七行一連に書写されておるのである。先に述べた如くこの点も三本同態であると考えられる。かくて「外題」と「標列」の意趣は相応し一致すると。

若しこの「標列の七行」を第一行と他の六行とを切り離せば「六行」は目次・目録の次第書の如く乾燥して命なきものとなり、「第一行」もまた此世のささやかなるセクト化した教法に転落してしまふであろう。茲に「化身土卷」に対する態度に於て、親鸞の仰せの如く如是であらねばならぬことにたいし、自見の覚悟を要することとなるのでなからうか。『化卷』を「権用」或いは

「簡非」の立場より了解する態度がある様である。すなわち仏願・仏教の権用の施設方便として肯定的に受け取ろうとする立場と、宗祖すでに「方便化身土」と称されたかぎりあくまで批判簡非の否定的態度を以て斯卷を受け取ろうとする態度である。これについての了解論義は後にする。「仮」も「偽」も与えられたる現実である。そこに「身」を持ち「世」を持つ「我」である。むしろそれが「身」であり「世」である我である。聞くべきは「名号」であり、仰ぐべきは「本願」である。肯定でもなければ否定でもない。頓教一乘海なる「真実教」を讀歎する「場」を示すものが「化身土卷」である。「化身土卷」の終末に「信願を因とし疑謗を縁として、信衆を願力にあらはし、妙果を安養にアラハサムト」無始時來性にかけたる悲願である。更に『安樂集』を引いて「真言を採りあつめて往益を助修せしむ。如何となれば先に生ぜむものは後を導き、後に生ぜん者は前を訪ひ連続無窮にして……無辺の生死海を尽むが為の故なりと」すなわち仮偽の世を場として悲願に感応した。この悲願のうちから願成就一実圓滿之真教真宗是也を感得した。それからさらにまた歩み出したものが華嚴經の偈を引文した意である。かくて今日の我等にまで真実の教行証が到達

することを願ひ約束されたものが「化卷」最末の尾題である。

今日の私にまで恵施された『教行信証』は我等のものである。『教行信証』を選述としてその形態を整備するの必しも悪しくもないかも知れぬ。現に『本書』は今日までに遅々たりと雖もその道を歩んで来た様である。しかし乍らそれが親鸞の信意識のうちに孕まれたる願いに異なることがあってはならぬ事は当然でありすぎるほどである。

「教卷」の「標列標挙」が「七行」として一連に「総序」の後、「教卷」の「題号」の前に置かれてあることは一応『阪東本』をもふくめての古写三本に於て然りと言い得るのであるが如く、現在は逸亡して不見の遵蓮の寛元の伝写本も右三本と同然と考え得る公算は大である。而してそれが親鸞の『教行信証』の本来性に相應するものであろうことを考慮した事ではあるが、然らば「七行」の標列標挙を分割したのは、何人何時期か、これが課題となつて来る。

結論的に言えばそれは——寛如——存覚——乘專の時代ではないかと思う。而してこの「曲り角」に於て歴史的に大きな道標の役を果したものが『六要鈔』のこの点に関

連する註釈及び註釈の「あり方」であると思う。もとより資料の僅少は止むを得ぬ事乍ら叱正を蒙り是正するにやぶさかではない事を申し上げておきたい。

二 『教行信証』の本質諸種 の伝本

今日我等が持つ様な整備された『教行信証』の「型態」は覚如―存覚―乗専の時代に調えられたものであって、その歴史的な曲り角に於て權威ある道標をなしたものが存覚の『六要鈔』であると思われることを前節に於て述べたことである。

周知の如く存覚の『六要鈔』はその奥書によれば延文五年で宗祖親鸞の入滅より九十九年目に当る。時に存覚は七十一歳であり父覚如滅後九年である。

存覚は元亨四年三十五歳の時『教行信証』を書写しておる。それは現に京都常楽寺に襲藏され、「証巻本」「証巻」一冊・「化身土巻本」二冊すなわち三冊を逸失してはおるが現在知り得る限りに於て八冊本の最古のものとして重要な意味をもつものである。また「真蹟本」「伝真蹟本」―『阪東本』『高田本』『西本願寺本』に次ぐ。書誌学的立場に於ての歴史的存在である。逸亡して現存しなくても古写本によるその奥書等に見ゆる伝写

をも加うると―「真蹟本」―「尊蓮伝写本」(寛元五年五)―「助阿伝写本」―「高田本」(建長七年宗祖七十八歳)―「西本願寺本」(文永十二年・宗祖滅後百)―「存覚伝写本」(四年宗祖滅後百)と次第して考えられるかと思う。これ等諸本についての解説は今度の宗祖七百回忌の大御遠忌の記念出版として東本願寺から刊行された国宝『阪東本教行信証』の影印本の附冊として出版を見た『親鸞聖人真蹟 国宝・顕浄土真実教行証文類影印本解説』に於て藤島教授が「教行信証の書誌」と題して書いておられるから就いて見られたい。必要な点だけを述べる。それは『教行信証』の解明の上に於いて歴史的偉業とも言うべき『六要鈔』(延文五年八月存覚八十一歳)の撰述をポイントとしてその前後をとりまく『教行信証』・「延書本」をもふくめて、それは如何なるものであったであろうか。これは一応の課題に価すると思う。

(一) 元亨四年・存覚時に三十五歳が伝写するまでの『教行信証』の諸種の伝写本の型態。

(二) 元亨四年頃より『六要』完成の延文五年頃までの『教行信証』の諸種の伝写本の型態。

(三) いわゆる「六要所依本」あるいは「六要所積本」は如何にして見出されたか或いは生まれたか。

三 『教行信証』の本質と異本

すでにしばしば言う如く、親鸞の『教行信証』は「浄土の眞実」すなわち「本願」をその玄底にたたえて、主体に約すれば信の流れであり、法に約すれば行の流れである。「雑行をすてて本願に帰す」と示された「本願そのもの」「生ける本願」「所有者のなき本願自体」それが説示される時に「番号」がついて「十七願」「十八願」等と言われ、何等かの名に於て示されるのである。しかもまたこれなくしては「本願」は此世のものとはならぬ。かくて建仁入信の「帰本願」の本願は法然上人の「教」に於て番号以前の「本願すなわち零号本願が親鸞に至り来つたのである。それが此世に帰れば選択本願と名づけられて、その歴史を作っていたのである。あらゆる親鸞的なるもの出發は此処から発足しこれに帰るのであるから『教行信証』の本質もここにある故に各巻の冒頭に標挙として願名が記されたのも自然の道理である。本願に限りなきが故にそれに摂受されて生きる信に終りはあり得ない。「信巻」の終尾は引文のままであつて結びの言葉が置かれてないのも、これ道理の自然の姿であろうか。かくて「心を弘誓の仏地に樹て念を難思の法海

に流す」この現行自体が教行信証とあらわれるのであるから『教行信証』はこの「樹心弘誓」の一念をはなれない「流情」の流れである。聖人の『教行証文類』は元仁を過る頃遠からずして一度び選述としての形をなしたてであろうか。しかしそれは決して今日の『阪東本』ではない。それは訂正され追補され削除され改編され生かされ清書され生かせる限り前の書写を生かしつつ漸次増宏されていったことは明らかである。『阪東本』では八十五歳を突破する聖人の筆蹟を見得るのである。「筆写本」としての今日の『阪東本』の「成りたち」には幾多の問題を孕んだままにあると思うのである。少くとも阪東本を資料としつつ『教行信証』の本質とそれが一つの聖人の撰述として発足し、一旦それが選述として成立しつつも猶もたえず増補されて愈々その本質たる宗教的眞実・親鸞の言葉を以て言えば浄土の眞実すなわち「本願」を頭しつつ生きていった。それが晩年まで及んだ。茲に存覚の『六要』に於ける「此書大概類聚の後、聖人幾しからずして帰寂の間、再治に及ばず……」の註解が成立する根拠があると思う。撰述としての『教行信証』は元仁をすぐることいくばくもない頃に成立しつつも撰述として晩年に及ぶまで聖人係念の聖典であつたことは、

度を重ねる訂正増補がその筆蹟の様態によっても窺い得る。本質的な表現を以てすれば、一なる浄土の真実がすなわち本願が「教」「行」「信」「証」「真仏土」「化身土」の六法の影像をとって愈々「入一法句」の道を顯わしつづけた。それが「教行信証」である。

いまこの考え方を逆にして、『教行信証』の流れを遡源して撰述として最初に結ばれたものに到着する。それを仮りに「原始教行信証」と仮に名づけるとするとそれから『阪東本』にいたる撰述としての推移があるわけである。この『教行信証』の年齢のいつ時代を伝写するかによって聖人の真蹟を「母本」とし乍らも種々の異本が生れうる道理である。「母本」そのものが成長して、形態に少くとも異つたもの多少ありとも頭れて来ていたのである。かくて「本典」の本流に対して茲に支流の系統が発生する。かくて支流と支流あるいは更にそれと次期の本流との間に種々の校異本が発生する。その間に書写の間に於ける偶然なる誤写誤脱が介在して来て古典を追求する者にとっての迷路が展開して来るわけである。さらに撰述者自身に偶然に犯した錯誤もあり得る。茲に古典の書誌学的研究は、ある場合、否！ほとんどの場合に一種の「限界」があると思う。この限界を超過する道

は、その古典の「真なる形態」又は尤も「真に近き形態」あるいは、さらに「真にあるべき形態」を追求する熱意に於て仏道に於ける「親鸞的方法」が身につつき、それに於てその古典の示す「宗教的真実」が生きて来ることである。かくて古典のもつ書誌学的迷路を解脱することが出来るとともにさらにこれこそがこの古典が撰述された目的に契うことであり、その古典がその本懐を果すことでもある。当時の総合大学であった比叡の靈峰から新しい時代の宗教が生れて仏教の歴史を荷負した。高野の真言は、今にその宗の名に於て生けるものを示しているけれども仏教の歴史を負う新しい責任者が生れなかつた。何故か。一には地理的理由にもよるかもしれないが、真なる意味での広大なる仏学の貧困によるのだろうか。観念的な陳述に始終して資料による解明を欠いたが今はそのいとまがない。存覚の「六要依用本」あるいは「六要所積本」なる『教行信証』の「形態」は書誌学的追求が当面した「限界」すなわち迷路を透過して「真にあるべき形態」を追求したところに見出された「校訂本」ではなからうか。三十五歳書写の存覚の『元亨本教行信証』から所謂『六要依用本』に到達する熱意は稽首するに価すると思う。

(未完)